

自己効力と時間的展望が職業不決断に与える影響

菊池 由美子*・増田 真也**

(2000年4月28日受理)

Effects of Self-efficacy and Time Perspective on Vocational Indecision

Yumiko KIKUCHI and Shinya MASUDA

キーワード：職業不決断，進路決定に対する自己効力，時間的展望

本研究の目的は、現代の大学生における職業不決断状態を把握し、さらに進路決定に対する自己効力及び時間的展望と職業不決断との関連を検討することであった。そのため、職業不決断尺度、進路決定に対する自己効力測定尺度、時間的展望尺度、未来展望における目標意識尺度という4つの尺度からなる質問紙を作成し、大学生175名を対象に調査を行った。その結果、職業不決断状態として5つの側面が得られ、それぞれにおいて、進路決定に対する自己効力を構成する6つの自己効力、時間的展望における時間的志向性、未来展望の内容である目標意識との関連に偏りや相違がみられた。また、進路決定に対する自己効力と時間的展望の在り方によって、どの程度職業不決断状態が説明され得るのかを検討するため行った重回帰分析の結果、職業不決断状態には、主に進路決定に対する自己効力により説明される側面と、時間的展望により説明される側面が存在することが明らかになった。得られた結果をもとに、進路決定に対する自己効力と時間的展望が、現代の大学生における職業不決断状態の各側面とどのように関わっているのか、また、これら2つの視点が職業不決断状態への介入に持つ可能性について考察した。

はじめに

長引く不況の影響で、大学生の就職環境は超氷河期と言われるまでに厳しさを増している。加えて、就職協定の廃止により、就職活動はますます早期化・長期化の傾向を見せ、大学生が早いうちからの進路選択を迫られる状況が続いていくことが予想される。このような大学卒業時の進路選択場面において、近年、職業意識の未熟さや職業選択過程における問題点を抱える学生が多いという職業不決断(vocational indecision)の問題が注目を集めている。Eriksonは青年が複雑な社会に入

* 茨城大学大学院教育学研究科

** 茨城大学教育学部教育実践総合センター

っていくための準備期間として心理・社会的モラトリアム期を考え、その間に青年は積極的な役割実験をするとしているが、今日注目されている職業不決断はこのような積極的な意味ばかりでなく、Osipowほか(1976)が指摘しているように、職業的意思決定課題への取り組みや、そのためのスキルに対する自信の無さという消極的な側面を持っている。この自信の無さは言い換えれば、自己効力の低さに相当するものである。

自己効力(self-efficacy)とは、Bandura(1977)によって提唱された概念であり、「成果を生み出すために必要な行動をどの程度適切に実行できるかについての確信度」と定義されている。自己効力は行動と直接的な関連を持つと仮定されており、さらに個人が行動に対してどの程度まで努力するか、困難に直面した際にどの程度耐え得るかも決定するとされている。青年の進路決定場面においても、進路決定という成果を生み出すための行動をどの程度適切に実行できるかどうかの確信度、すなわち進路決定に対する自己効力が行動を規定していることは十分に考えられることである。進路決定に対する自己効力(career decision-making self-efficacy)研究は、Taylor and Betz(1983)により始まっている。彼らは進路決定に困難を示す者に対する介入の視座を持つものとして自己効力概念をとりあげたのである。職業選択場面において、有効な職業選択という成果を生み出すために必要となる様々な行動を確実に実行できるという確信が低い場合、実際に行動に移すことができず、結果的に職業不決断状態に陥ってしまうと考えられる。また、この自己効力概念を用いる利点として、それが単なる行動の説明変数ではなく、行動変容のために操作することが可能であることがあげられる。つまり、進路決定に対する自己効力を高揚させるような介入を行うことにより、主観的な自己効力の低さを要因とする職業不決断状態の改善を促すことが可能であると考えられるのである。

ところで、進路決定プロセスには過去を振り返り、現在を見つめ、将来を予測する心理的過程が存在している。故に「ある一定時点における個人の心理学的過去・現在・未来の見解の総体」つまり時間的展望(time perspective)が進路決定場面において大きな影響力を持っていることが予想される。また、青年期は年齢規範や発達課題を念頭に置きながら、自分の目標を明確化し、将来の時間的展望を確立していく時期であると言える。そして、その目標は青年期だけでなく、その後の広い範囲を含むものであり、視野の広い進路決定が要求されるのが青年期の特徴である。よって、自分の生き方を真剣に考えざるを得ないこの時期に、未来に開かれた時間的展望の確立は切実な課題であり、時間的展望の在り方が有効な進路決定の規定因となり得ることは十分に考えられる。特に、未来展望の在り方は、これから自分が進むべき道を決定するという職業選択場面において、必要とされる行動に対する意欲や態度に大きな影響力を持つと考えられるのである。しかし、青年の職業不決断と時間的展望を直接検討した研究は見られず、両者の関連は明らかにされていない。

そこで、本研究では、現代の大学生における職業不決断状態を把握するとともに、進路決定に対する自己効力と職業不決断との関連について、また、時間的展望の在り方と職業不決断との関連について調査することとした。

調査の手続き

被調査者：茨城県及び千葉県の国私立4年制大学における2・3年生175名。内訳は2年生80名（男子37名、女子43名）、3年生95名（男子34名、女子61名）であった。また、所属学部は人文学部103名、教育学部63名、理工学部9名であった。

調査内容：調査は①職業不決断尺度、②進路決定に対する自己効力測定尺度（Career Decision-Making Self-Efficacy scale：CDMSE尺度）、③時間的展望尺度、④未来展望における目標意識尺度という4つの尺度で構成されている。

職業不決断尺度は、清水（1989）、下山（1986）らの職業不決断尺度及び関連尺度を参考に、重複する項目は削除するとともに、職業不決断における側面を幅広くとらえることができるようにさらに項目を加え、検討の結果、合計46項目を採用した。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法である。

CDMSE尺度については、改定が重ねられている浦上（1995）の30項目からなる尺度を使用する。回答は「非常に自信がある」から「全く自信がない」までの4件法である。

時間的展望尺度は、杉山・神田（1991）の時間的展望尺度と白井（1991）の時間的信念尺度を参考にして19項目からなる尺度を作成した。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法である。

また、時間的展望が現在の活動に影響を与える視点として、未来展望の欲求・動機的側面を測定するため、都築（1999）による目標意識尺度の中から、第6因子を除く5因子「将来への希望」、「将来目標の有無」、「将来目標の渴望」、「時間管理」、「計画性」のそれぞれにおいて因子負荷量.600以上の項目を選択し、合計17項目からなる尺度を「目標意識尺度」として設定した。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法である。

以上のような質問内容でA4版の用紙6枚1組の質問紙を作成した。調査は1999年11月下旬から12月中旬にかけて行われた。

結 果

まず、各尺度の内的な構造を明らかにするために、尺度毎に主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転による解を求めた。その際、あらかじめ各項目の平均値と標準偏差を算出し、平均値±標準偏差が得点の上限値及び下限値の範囲から外れる項目は不良項目として除外した。また、因子分析で抽出された各因子においては、因子負荷量の絶対値が.400以上の項目を因子項目としてとりあげた。

まず、職業不決断尺度においては、上記の方法による因子分析の結果、5因子が得られた（Table1）。それぞれの因子において単純合計得点尺度を構成し、Cronbachの信頼性係数を算出したところ、第1因子から順に.914、.796、.745、.634、.632であった。第1因子は、自己の適性や職業内容、選択の基準などの情報不足を示す項目と進路を自分自身で決定していくことに対する自信の低さを示す項目がまとまったものであり、「情報・自信不足」として解釈することができる。第2因子は、

進路について他者に相談したいという意志を示す項目と漠然とした希望進路に関連する不安を示す項目がまとまった因子であり、「希望関連相談希求」と命名した。また、第3因子は、特定の職業に就くことに対する意志の欠如と現在の状態を維持し職業決定を回避したいという態度を示す項目群であり、「モラトリアム」を表すものである。第4因子は、職業決定に対する積極的な態度を持ち、現在は進むべき進路について模索する時期であるといった考えを示す項目群であり、「模索」とした。第5因子は、職業決定は自分自身の力ではなく、コネや運など外的なものの影響が大きいという考えを示す項目群であり、「外的統制」と命名した。

Table 1 職業不決断尺度の因子分析結果

		因子負荷量	固有値	寄与率	α 係数
F1	10 自分の能力や適性がよくわからないので将来の職業が決まらない	.825			
	2 自分の興味や関心がよくわからないので将来の職業が決まらない	.795			
	45 いろいろと考えすぎて自分に合う職業が決まらない	.786			
	46 今の状態では自分の一生の仕事など見つかりそうもない	.767			
	34 自分のことについても職業のことについてもよくわからないので将来の職業が決まらない	.755			
	41 自分の将来の職業については何を基準に考えたらよいかわからない	.670	6.716	17.673	.914
	26 進路先を決めるために必要な具体的な情報がないので将来の職業が決まらない	.660			
	9 将来の職業を決めることが漠然としていて不安である	.619			
	44 将来自分が働いている姿が全く思い浮かばない	.570			
	32 できることなら誰か他の人に自分の職業を決めてもらいたいと思うことがある	.515			
25 誤った職業決定をしてしまうのではないかと不安があり決定できない	.509				
18 就職した後での職業生活がよくわからないので将来の職業が決まらない	.508				
F2	4 就職の問題は重要なことなので誰かと相談したい	.646			
	27 希望する職業において、そこでやっていけるかどうか不安である	.614			
	35 希望する職業はあるが、それが最良なのかどうか不安である	.604			
	43 具体的な将来の職業を考えているが採用試験に自信がない	.572			
	12 自分一人で何かを決めた経験が少ないので、就職について誰かと相談したい	.570	3.998	10.522	.796
	20 今までも重要な問題は親などと相談してきたので、就職の問題でも相談したい	.532			
	11 何かの影響で希望する職業につくことができなくなるのではないかと心配になる	.528			
	40 職業につけたとしてもうまくやっていく自信がない	.504			
	42 将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる	.492			
	15 就職先の決定は自分一人の力ではどうしようもない	.473			
F3	30 できることなら職業など持たずいつまでも好きな事をしていたい	.832			
	37 職業のことなど考えずに自分の好きなことに集中していきたい	.756	2.775	7.303	.745
	6 できることなら職業決定は先に延ばし続けておきたい	.594			
	31 将来の職業のために積極的に努力するよりもチャンスを待つ方がよい	.568			
F4	13 これだと思う職業が見つかるまでじっくり探していくつもりだ	.709			
	5 職業を最終的に決定するのはまだ先のことであり、今はいろいろなことを経験して時期だと思う	.631	2.373	6.245	.634
	29 魅力ある職業がいくつもあるので、将来の職業を決められない	.532			
	36 可能性のある職業がたくさんあるので、どれにしたらよいかわからない	.443			
F5	17 将来の職業についていろいろ計画を立てるが、一貫性がなく徐々に変化していく	.622			
	24 できるだけ有名なところで就職したいと思っている	.616			
	7 就職先の決定は運や偶然によって決まることが多い	.564	2.290	6.027	.632
	38 コネやツテを利用して良い職業につきたい	.524			
	23 自分の努力や能力よりも、他からの影響で職業が決まることが多い	.449			

CDMSE尺度についても同様に、主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転による解を求めたところ、6因子が得られた (Table 2)。各因子の単純合計得点尺度におけるCronbachの信頼性

係数は、第1因子から順に.799, .656, .692, .560, .573, .486であった。Taylor and Betz (1983)はCDMSE尺度の50項目を準備する際に、Crites (1965)を参考にして「進路選択」「情報収集」「自己評価」「計画立案」「問題解決」の5下位尺度を設定している。本研究で抽出された6因子のうち第1因子から第5因子まではこれらの5下位尺度とほぼ対応する。したがって、これらを参考にしながら、より各因子の特徴を表すように改善し、第1因子「自己適性評価自己効力」、第2因子「計画遂行自己効力」、第3因子「情報収集自己効力」、第4因子「進路検討自己効力」、第5因子「困難対処自己効力」と命名した。また、第6因子については、現在の活動と関連させながら将来の職業の見通しを持つことを示す項目群であると解釈できるので「将来展望自己効力」とした。

Table 2 進路決定に対する自己効力測定尺度の因子分析結果

		因子負荷量	固有値	寄与率	α係数
F1	28 自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと	.746			
	6 人間相手の仕事か、情報相手の仕事かどちらが自分に適しているか決めること	.692			
	7 自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと	.660	3.879	13.374	.799
	16 自分の才能を最も生かせる職業分野を決めること	.658			
	2 自分が従事したい職業(職種)の仕事内容を知ること	.601			
	1 自分の能力を正確に評価すること	.407			
F2	15 欲求不満を感じても自分の勉強または仕事の成就まで粘り強く続けること	.587			
	26 将来どのような生活をしたいかはっきりとさせること	.586	2.522	8.697	.656
	14 将来のために在学中やっておくべきことの計画を立てること	.583			
	10 将来の仕事に役立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること	.493			
F3	22 自分の就職する年の雇用傾向についてある程度の見通しを持つこと	.715			
	25 学校の就職係や職業安定所を探し利用すること	.555			
	27 自分の職業選択に必要な情報を得るために新聞・テレビ・インターネットなどのメディアを利用すること	.521	2.477	8.541	.692
	23 自分の将来設計に合った職業を探すこと	.512			
	17 自分の興味を持っている分野で働いている人と話す機会を持つこと	.509			
F4	21 いくつかの職業に興味を持っていること	.657			
	29 卒業後さらに大学や大学院・専門学校に行くことが必要なのかどうかを決定すること	.639			
	30 望んでいた職業が自分の考えていたものと異なっていた場合もう一度検討し直すこと	.544	2.145	7.396	.560
	20 両親や友達が勧める職業であっても、自分の適性や能力に合っていないと感じるものがあれば断ること	.449			
F5	8 何かの理由で卒業を延期しなければならなくなった場合それに対処すること	.712			
	5 もし望んでいた職業につけなかった場合それに対処すること	.640	2.119	7.307	.573
	13 就職したい産業分野が先行き不安定であるとわかった場合それに対処すること	.476			
F6	19 自分の将来の目標とアルバイトなどでの経験を関連させて考えること	.661			
	4 5年先の目標を設定しそれにしがつて計画を立てること	.571	1.836	6.332	.486
	12 ある職業についている人々の年間所得について知ること	.527			

時間的展望尺度についても同様の因子分析の結果、次の3因子が抽出された (Table 3)。各因子の単純合計得点尺度におけるCronbachの信頼性係数は、第1因子から順に、.736, .653, .610であった。第1因子は主に、過去志向性として設定した項目と過去から現在の状況に対する不満を示す項目がまとまっているため、「過去志向性」とした。第2因子は現在志向性として設定した項目であり「現在志向性」とした。第3因子には、未来志向性として設定した項目と未来への希望を示す項目がまとまっており、「未来志向性」と命名した。

Table 3 時間的展望尺度の因子分析結果

		因子負荷量	固有値	寄与率	α 係数
	13 不満なことがたくさんある	.739			
	15 もう一度小さい頃に戻ってやり直したい	.714			
F1	6 これまであまりいいことがなかった	.681	3.037	16.874	.736
	16 実現しそうにないことばかり考えている	.662			
	3 ちょっとしたことでも未来に希望が持てなくなる	.618			
	9 小学生の頃のことをよく思い出す	.419			
	10 どうなるかわからない先のことを考えても仕方がない	.720			
	8 無理に見通しを持つ必要はない	.695			
F2	19 将来のことをいちいち考えてそれに縛られるのは不自由だ	.645	2.333	12.963	.653
	14 先がわからないならわからないまま生きる道はある	.564			
	2 今が楽しければそれで良い	.508			
	12 小さいときに頑張ったことが今役に立っている	.663			
	7 自分の目標のために努力している	.653			
F3	17 自分の将来の見通しは明るい	.613	2.165	12.026	.610
	5 自分の今やっていることが自分の将来に影響する	.523			
	1 毎日が楽しい	.464			
	11 早く大人になりたい	.427			

未来展望における目標意識尺度についても同様の因子分析の結果、以下の5因子が抽出された (Table 4)。各因子の単純合計得点尺度におけるCronbachの信頼性係数は、第1因子から順に、.896、.835、.786、.787であった。得られた各因子は、都築 (1999) によって設定された5下位尺度に対応していることから、第1因子「将来目標の有無」、第2因子「将来への希望」、第3因子「将来目標の渴望」、第4因子「時間管理」、第5因子「計画性」とした。

Table 4 目標意識尺度の因子分析結果

		因子負荷量	固有値	寄与率	α 係数
	33 私は自分の将来に夢を持っている	.880			
F1	29 私は生きていくうえで目指すものがある	.864	2.840	16.703	.896
	21 私には将来の目標がある	.861			
	24 自分の将来に希望が持てなくなることが良くある	.782			
	26 自分の将来のことを考えると不安になる	.735			
F2	22 どんな困難が生じてでも将来うまくやっていく自信がある	.724	2.821	16.592	.835
	20 自分の将来は自分で切り開く自信がある	.665			
	28 私の将来には希望が持てる	.625			
	32 私は自分なりの人生目標がほしい	.867			
F3	36 自分の将来の見通しがほしい	.843	2.216	13.033	.786
	27 私は自分の将来計画を持ちたい	.729			
	23 私は自分がしたいことを全部できるような毎日毎日管理して時間配分している	.818			
F4	30 私はその日にしなければならぬことを計画してから活動する	.813	2.204	12.967	.786
	34 私は自分の時間を効果的に使うことを考えて計画を立てる	.812			
	31 私は何かをやるとき時間ぎりぎりになってから急いでやる方だ	.907			
F5	25 何かをやろうとしても切の日にならないとなかなか始められない	.802	2.140	12.587	.787
	35 他人から期日を指定されないといつまでもやろうとしない	.748			

次に、職業不決断、進路決定に対する自己効力、時間的展望、目標意識の各下位尺度得点間におけるPearsonの積率相関係数を算出した (Table 5 - 1, 5 - 2)。

まず、職業不決断と進路決定に対する自己効力の相関について全体を通してしてみると、「模索」を除いて、職業不決断の各側面と進路決定に必要なさまざまな行動に対する自己効力には有意な負の相関が見られ、それぞれの側面によって関連する自己効力に偏りが見られた。「模索」については、「進路検討自己効力」と正の相関を示した ($r=.181, p<.05$)。

職業不決断と時間的展望の関連については、まず、職業不決断の「情報・自信不足」、「モラトリアム」が「未来志向性」と負の相関を示し ($r=-.452, r=-.282$, ともに $p<.01$)、「現在志向性」と正の相関 ($r=.217, r=.513$, ともに $p<.01$)、「過去志向性」とも正の相関を示した ($r=.349, r=.313$, ともに $p<.01$)。「希望関連相談希求」においては、「未来志向性」との間に負の相関が見られ ($r=-.204, p<.01$)、「過去志向性」との間に正の相関が見られた ($r=.279, p<.01$)。職業不決断の「模索」は、「現在志向性」とのみ有意な正の相関を示した ($r=.246, p<.01$)。そして、職業不決断の「外的統制」については、「現在志向性」、「過去志向性」との間に有意な正の相関が見られた ($r=.166, p<.05$; $r=.282, p<.01$)。

職業不決断と未来展望における目標意識との関連についてみると、まず、職業不決断の「情報・自信不足」が「将来への希望」、「将来目標の有無」との間に負の相関が見られ ($r=-.562, r=-.585$, ともに $p<.01$)、「将来目標の渴望」との間に正の相関が見られた ($r=.330, p<.01$)。また、「計画性」との間に正の相関 ($r=.208, p<.01$)、「時間管理」との間に負の相関を示している ($r=-.268, p<.01$)。職業不決断の「希望関連相談希求」では、「将来への希望」、「将来目標の有無」との間に負の相関が見られ ($r=-.527, r=-.288$, ともに $p<.01$)、「将来目標の渴望」との間に正の相関が見られた ($r=.349, p<.01$)。また、職業不決断の「モラトリアム」は、「将来目標の有無」、「時間管理」と負の相関 ($r=-.162, r=-.186$, ともに $p<.05$)、「計画性」と正の相関を示している ($r=.213, p<.01$)。職業不決断の「模索」については、「将来目標の渴望」、「計画性」との間に正の相関が見られた ($r=.152, r=.166$, ともに $p<.05$)。職業不決断の「外的統制」については、「将来への希望」との間に負の相関 ($r=-.238, p<.01$)、「計画性」との間に正の相関を示した ($r=.171, p<.05$)。

Table 5 - 1 職業不決断と進路決定に対する自己効力の相関係数

	進路決定に対する自己効力					
	自己適性評価自己効力	計画遂行自己効力	情報収集自己効力	進路検討自己効力	困難対処自己効力	将来展望自己効力
情報自信不足	-.587**	-.464**	-.347**	-.297**	-.179*	-.245**
希望関連相談希求	-.371**	-.334**	-.323**	-.304**	-.401**	-.110
モラトリアム	-.100	-.238**	-.105	-.171*	.017	-.060
模索	-.140	-.112	.066	.181*	-.010	-.098
外的統制	-.149*	-.203**	-.088	-.041	-.163*	.083

** $p<.01$ * $p<.05$

Table 5-2 職業不決断と時間的展望の相関係数

	将来への希望	目標の有無	時間的展望					
			目標の 渴望	時間管理	計画性	未来 志向性	現在 志向性	過去 志向性
情報自信不足	-.562**	-.585**	.330**	-.268**	.208**	-.452**	.217**	.349**
希望関連 相談希求	-.527**	-.288**	.349**	-.013	.113	-.204**	.047	.279**
モラトリアム	-.134	-.162*	.043	-.186*	.213**	-.282**	.513**	.313**
模索	-.006	-.073	.152*	-.129	.166*	.127	.246**	.135
外的統制	-.238**	-.120	.144	-.051	.171*	.037	.166*	.282**

** p<.01 * p<.05

次に、職業不決断の各側面を進路決定に対する自己効力及び時間的展望の各下位尺度からどの程度説明できるかを検討するため、職業不決断を目的変数、進路決定に対する自己効力と時間的展望を予測変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 6)。「情報・自信不足」を目的変数とした分析では有意水準 5% で、「自己適性評価自己効力」、「将来目標の有無」、「過去志向性」、「将来目標の渴望」、「現在志向性」、「将来への希望」の順に説明力を持つことが示された。また、これら 6 変数によって「情報・自信不足」という変数全体の 56% を説明することができる。次に、「希望関連相談希求」を目的変数とした場合は、順に「将来への希望」、「将来目標の渴望」、「困難対処自己効力」、「情報収集自己効力」、「時間管理」、「現在志向性」という 6 つの予測変数が説明力を持つことが示された。同様に、「モラトリアム」では「現在志向性」、「過去志向性」、「未来志向性」の 3 変数が順に予測力を持ち、全体の 37% が説明された。「模索」を目的変数とした分析では、「現在志向性」、「進路検討自己効力」、「自己適性評価自己効力」、「計画性」という 4 つの予測変数が順に大きな予測力を持ち、合計で 17.0% の説明が可能であることが示された。「外的統制」を目的変数とした分析では、「過去志向性」、「現在志向性」の 2 つの予測変数によって 10.4% の説明力を持つという結果であった。

Table 6 重回帰分析結果

	Step	予測変数	決定係数 (R ²)	標準偏回帰係数 (β)
情報・ 自信 不足	1	自己適性評価自己効力	.344	-.258**
	2	将来目標の有無	.433	-.301**
	3	過去志向性	.487	.132*
	4	将来目標の渴望	.518	.177**
	5	現在志向性	.553	.205**
	6	将来への希望	.565	-.158*
希相 望談 関希 連求	1	将来への希望	.277	-.356**
	2	将来目標の渴望	.313	.203**
	3	困難対処自己効力	.345	-.203**
	4	情報収集自己効力	.369	-.191**
	5	時間管理	.389	.176**
	6	現在志向性	.405	.129*
モリ ラア トム	1	現在志向性	.263	.483**
	2	過去志向性	.350	.257**
	3	未来志向性	.370	-.147*
模 索	1	現在志向性	.061	.225**
	2	進路検討自己効力	.095	.293**
	3	自己適性評価自己効力	.136	-.219**
	4	計画性	.170	.185**
外統 的制	1	過去志向性	.080	.276**
	2	現在志向性	.104	.155*

*p<.05 **p<.01

考 察

職業不決断尺度の因子分析の結果、下位尺度として「情報・自信不足」、「希望関連相談希求」、「モラトリアム」、「模索」、「外的統制」の5つが得られた。米国における職業不決断研究において考案された職業未決定尺度(A Scale of Vocational Indecision: SVI)、職業決定困難尺度(Vocational Decision-Making Difficulty Scale: VDMD)の両尺度と比較してみると、SVIでは「自信の欠如・選択不安」、「外的障害の存在」、「最終的決定の困難」、「人格的葛藤の存在」の4因子、VDMDでは「情報不足」、「適性不明」、「選択不安」、「能力への疑問」の4因子が見出されているのに対して、本研究での職業不決断尺度においては、「モラトリアム」、「外的統制」という上記の尺度には含まれない因子が見出されている。我が国の職業不決断研究における尺度ではともにこれらの因子が見出されていることも踏まえて、「モラトリアム」及び「外的統制」は我が国特有の職業不決断状態とも言えるだろう。米国における職業モラトリアムは、積極的な探索期を指しており、本研究の尺度内では「模索」に相当するものである。このような相違は、米国では職業カウンセリングやキャリア・エデュケーションが非常に充実しているのに対して、我が国の進路(進学)指導が主に大学進学を目指して行われており、大学での進路指導は十分に行われていないために不自然で曖昧な職業選択が多く見られるという現実を反映した結果とも言える。

また、下位尺度の得点の平均値を比較してみると、「希望関連相談希求」の得点が最も高く、大学生が職業決定の問題について誰かと相談したいと考えていることが示された。このことから、大学における就職指導の需要の高さがうかがえる。

現代の大学生の職業不決断状態は、自分の能力・適性や職業内容、選択基準などの情報が不足していること、漠然とした希望職業を持つ者でも進路に多くの不安を抱えており他者に相談したいと思っていること、また、進路決定は運やコネなど外的な影響で決まるという意識を持っている者、積極的に進路を模索する者、そして、職業決定を回避したいという意識を持つ者などが存在していることなど、職業決定に対する積極的態度から消極的態度まで幅広く見出された。

次に、職業不決断、進路決定に対する自己効力、時間的展望の関連についてであるが、まず、進路決定に対する自己効力と職業不決断におけるそれぞれの下位尺度の関連については以下のような特徴がみられた。職業不決断の「情報・自信不足」と進路決定に対する自己効力の全下位尺度との間に有意な負の相関、「希望関連相談希求」と「将来展望自己効力」を除く5下位尺度との間に比較的強い負の相関が得られている。また、「モラトリアム」及び「外的統制」については「計画遂行自己効力」との間に比較的強い負の相関が得られた。このような結果から、進路決定に必要な様々な行動に対する自己効力の低さが、職業情報や自己の能力・適性情報の不足を訴える職業不決断状態と強く関連していること、また、進路決定場面での他者への相談希求の高さと関連することが明らかとなった。進路決定場面において、必要とされる行動を適切に実行できると確信できない場合、自分一人では対処しきれず、他者に援助を求めることが予想される。また、情報収集や自己適性評価をはじめとして、進路決定に必要な行動に対する自己効力が低い場合、そのような行動を積極的に実行することは困難であり、結果的に自分の認知通りに、情報不足や進路不安の状態に陥るものと思われる。「モラトリアム」及び「外的統制」と「計画遂行自己効力」との関連については、計画の立案・実行において自分は確実に実行できるという確信の低さが、職業決定

を回避、または先延ばしにしたいといったモラトリアム傾向や、職業決定は自分一人の力ではどうなるものでもなく環境の影響が大きいといった外的統制傾向と強く関連することを示している。物事を計画立てて遂行してきたか否か、且つそれが結果の成功を導いたか否かという個人の認知や実際の過去経験を情報源として、進路決定場面における「計画遂行自己効力」の程度が影響を受けていると考えられるため、そのような自己効力の低さが決定を回避したいと考えたり、環境に対して自分の持つ影響力の低さを意識することは当然予想されることではないだろうか。

なお、職業不決断の「模索」は「進路検討自己効力」と弱い正の相関を示し、その他の進路決定に対する自己効力下位尺度とは関連しなかった。現在、自分自身の進路について積極的に模索しているということは、進路決定に対して実際の行動を起こし始めているということである。進路検討は職業決定の初期の段階であり、このような活動に対する自己効力の高さと「模索」が正の相関を示すということは、積極的な進路意識及び実際の職業選択行動と進路決定に対する自己効力の高さが関連する可能性を示唆するものと考えられるのではないだろうか。

以上のように、進路決定に対する自己効力の低さと職業不決断状態にあることには関連があり、さらに、職業不決断の各側面によって、関連する自己効力に偏りがあることがわかった。

次に、時間的展望と職業不決断との関連についてみると、まず、職業不決断の「情報・自信不足」と「未来志向性」との間に強い負の相関、「現在志向性」「過去志向性」との間に強い正の相関がみられた。また、職業不決断の「モラトリアム」は、「現在志向性」と強い負の相関を示し、「未来志向性」と負の相関、「過去志向性」とは正の相関を示した。職業不決断の「希望関連相談希求」では、「未来志向性」との間に負の相関、「過去志向性」との間に正の相関がみられた。そして、職業不決断の「模索」と「現在志向性」との間、職業不決断の「外的統制」と「過去志向性」との間に、それぞれ正の相関がみられた。

以上のような結果から、職業不決断状態にある者は全体的に未来志向性が低いこと、その中で、特に現在志向性の強い者はモラトリアム傾向や模索状態を示し、加えて、特に過去志向性の強い者は外的統制傾向を示すことなどが明らかになった。

未来展望における目標意識と職業不決断の関連については、まず、「将来への希望」が職業不決断の「情報・自信不足」、「希望関連相談希求」と高い負の相関を示し、「外的統制」と比較的高い負の相関を示した。そして、「情報・自信不足」、「希望関連相談希求」においては、さらに「将来目標の有無」と負の相関、「将来目標の渴望」と正の相関を示している。これは、職業不決断状態の中でも、職業決定を望んでいるにも関わらず、決定できないでいる者が未来に対する希望や見通しの低さを示している。また、将来に対する見通しの低さや不安を感じながらも、「どうせ自分は」というように目標を渴望しない者は、自分の結果に対する影響力の低さを強く感じることがうかがわれる。また、「時間管理」は、職業不決断の「情報・自信不足」と高い負の相関、「計画性」の低さは「情報・自信不足」、「モラトリアム」と高い正の相関を示した。現在において、物事を計画的に進めることができるという認知が低いことは、進路選択場面において回避的な態度や不安の高い状態と強く関連していることがわかる。また、時間を有効活用することができるという認知できないことが、進路選択場面での自己の能力への疑念や漠然とした不安の高さに関連することが示された。

以上のように、自分の将来に明るい見通しが持てず、目標渴望状態であること、また、日常生活

における時間管理・計画能力を低く認知していることが職業不決断状態の各側面と関連を持つことが明らかとなった。

次に、職業不決断の各側面を進路決定に対する自己効力及び時間的展望の各下位尺度からどの程度説明できるかを検討するために行ったステップワイズ法による重回帰分析の結果について考察する。重回帰分析結果について全体を通して見ると、職業不決断の「情報・自信不足」、「希望関連相談希求」、「模索」において、進路決定に対する自己効力による説明力が大きく、「モラトリアム」、「外的統制」については時間的志向性による説明力がある程度持つことが示された。

「情報・自信不足」の予測変数をみても、将来目標を持たないこと、自己適性評価自己効力の低さ、現在志向性の高さ、将来目標に対する渴望の強さが主な予測因となっている。この中で、自己適性評価という行動に対する自己効力が低いということが、職業選択過程における情報の不足感を伴った不安を高め、職業不決断状態を導いていると考えられる。加えて、現在志向的であることは、不確実な未来からの逃避という側面に目を向ければ、情報収集行動に対しても消極的な態度を示すと思われる。このような未来に目を向けない態度が積極的な情報収集行動を阻害し、職業不決断状態を導くと思われる。「情報・自信不足」は、6つの予測変数により50%以上が説明でき、職業不決断の中でも自己効力と時間的展望の影響が大きい側面であると言えるだろう。

「希望関連相談希求」の予測因をみると、「情報・自信不足」同様、将来目標の渴望の強さが予測力を持っているが、「希望関連相談希求」ではそれ以上に将来への希望の低さや見通しの暗さがさらに大きな予測力を持っている。これは、未来に対する不安の高さが相談を希求する態度につながったものと思われる。また、困難に直面した際に適切な対処ができるか否かについての自己効力、情報収集行動に対する自己効力の低さも相談希求の高さを予測する。これらの行動に対する自己効力が低いということは、自分一人では有効な職業選択ができないという意識を高められるので他者の援助を求める態度を起こさせるのだろう。

「模索」の予想因では、最も強い予測力を持つものは「進路検討自己効力」の高さであり、次いで「現在志向性」の高さ、「自己適性評価自己効力」の低さ、そして「計画性」の低さの順である。職業不決断状態の中でも「模索」は職業選択・進路決定に対して積極的な態度を持つ側面である。現在は模索状態にあると認知している者は、自分の進むべき進路の探求行動を実際に実行している状態にあると言える。このような行動を起こすには、そのような行動を自分は効果的に実行できるという遂行可能感が必要となる。この遂行可能感、つまり進路検討自己効力の高さが進路についての模索的な態度を生じさせると言えるだろう。しかし、逆に「自己適性評価自己効力」の低さが「模索」の予測力を持つことは、能力・適性に対する的確な自己評価ができていないかもしれないという意識が、その個人の最終的な希望職業の決定を阻害し、模索状態にとどめているとも言えるのではないだろうか。

職業不決断の「モラトリアム」の予測変数を見ると、進路決定に対する自己効力の変数は見られず、「現在志向性」及び「過去志向性」の高さ、「未来志向性」の低さが予測力を持つ。モラトリアムと現在志向は内容的にはほぼ対応する変数であるのでこれは当然の結果であるが、次いで予測力を持つ「過去志向性」の高さ、「未来志向性」の低さは、モラトリアムの逃避的な態度をよく表すものである。つまり、過去においても未来に対しても不満や不安が大きく、これらから目を逸らすように刹那的な態度を示していると解釈できるのではないだろうか。

最後に「外的統制」の予測変数をみてみると、「過去志向性」の高さが比較的大きな予測力を持つものの、全体としては10.4%の説明力を持つのみにとどまっている。外的統制傾向は、これまでの過去経験における失敗体験や、努力は報われないといった自分が持つ結果への影響力の低さを認知することによって導かれると考えられる。従って、過去への不満や後悔、意識がそこから先に進めないでいる状態と深く結びついているのではないだろうか。「過去志向性」は外的統制のそのような情報源と関連するものであるだろう。

以上のように、職業不決断の各側面はそれぞれに進路決定に対する自己効力、時間的展望からある程度の予測が可能である。「モラトリウム」及び「外的統制」は進路決定に対する自己効力から予測することは出来ないが、これは職業不決断状態におけるこれら2つの側面が、進路決定場面のみならず、日常生活全般に及ぶ広範な特性として存在しているものであるため、進路決定場面に限定した自己効力による予測では不十分であり、広範な影響力を持つ時間的展望によってより大きな予測力を持ったのではないかと考えられる。従って、進路指導場面において職業不決断状態を示す者に対する介入を考慮するとすれば、情報不足や決定不安を訴える者、相談を希求している者、模索状態にある者については、自己適性評価や情報収集行動、進路検討行動など具体的な職業決定過程の行動に対する自己効力を高揚させ、進路決定全般に対する自己効力を高めるような介入を行うことが有効な改善策の一つとなり得ると思われる。しかし、モラトリウムや外的統制のような傾向を持つ者については、進路決定に対する自己効力を高揚させる以前に、未来に開かれた時間的展望を持たせるような介入が必要となるであろう。

ま と め

現代の大学生が卒業後の職業選択・進路決定場面で困難を抱えていることは重ねて述べてきた。中学・高校の進路指導のあり方、大学での進路（就職）指導の不十分さも含め、厳しい就職環境におかれた現代の大学生にとって、職業選択・進路決定は非常に切実な問題である。その後の人生にも大きく関わる岐路であるだけに、適切な対処が望まれるものである。しかし、このような場面で、自分は一体何がしたいのか、何ができるのか、という問いに答えが出せず、職業不決断状態に陥ってしまう学生も多い。

本研究の主な目的は、このような現代の大学生における職業不決断の問題に対して、Taylor and Betz (1983) により進路決定場面に応用されたBandura (1977) の自己効力概念を用いて、進路決定に対する自己効力と職業不決断との関連を検討することであった。また同時に、職業選択・進路決定が過去を振り返り、現在を見つめ、未来を見通すという進路的な事象を内包することから、個人の時間的展望の在り方と職業不決断との関連について検討することを目的としてきた。

本研究の結果では、職業不決断の側面として「情報・自信不足」、「希望関連相談希求」、「モラトリウム」、「模索」、「外的統制」という5つの下位尺度が得られ、それぞれにおいて進路決定に対する自己効力を構成する6つの自己効力、及び時間的展望における時間的志向性、未来展望の内容としての目標意識との間に有意な関連が見出された。つまり、進路決定に必要とされる様々な行動に対する自己効力が低いことと職業不決断の間には関連があり、また、将来に対するポジテ

イブな態度や未来に開かれた時間的展望を持たずに、現在志向的あるいは過去志向的な態度を持つことと職業不決断状態状態にあることとの間に関連があるということである。また、職業不決断が進路決定に対する自己効力及び時間的展望によってどの程度予測されるかを探索的に探ろうとして行った重回帰分析の結果、職業不決断の各側面のうち「情報・自信不足」、「希望関連相談希求」、「模索」においては、進路決定に対する自己効力及び時間的展望による予測が可能であること、「モラトリアム」、「外的統制」の側面については、時間的志向性によりある程度の予測が可能であることが示された。つまり、同じ職業不決断状態であっても、「モラトリアム」や「外的統制」などのように、職業決定のみならず生活全般に及ぶ側面に関しては、進路決定に対する自己効力による予測では不十分であり、時間的展望の持ち方の違いによる影響がより大きいことがわかる。一方、職業選択場面のみでの不安や混乱を示す側面においては、進路決定に対する自己効力の低さが有効な予測因となることが示された。

このような結果は、現代の大学生の職業不決断状態を実証的に把握していくことに大きく貢献するものであったと思う。そして、Bandura (1977) により行動変容のために操作可能であるとされる自己効力概念との関連が示されたことは、不決断状態の学生に対する介入の視座を与えるものである。また、これまでに検討されてこなかった職業不決断と時間的展望の関連についても意義のある結果が得られたと思われる。

ただし、今回の研究は就職活動に入る前の2・3年生を対象とした調査であり、実際の職業行動について検討されていないため、自己効力と職業不決断の因果関係についてはまでは明らかにされなかった。調査の限界もあり本研究では行えなかったが、行動を直接的に予測すると仮定されている自己効力概念の特徴を考慮するなら、縦断的な調査方法を用いて、実際の就職活動をも含めて研究することが望ましかった。

また、時間的展望の測定については、時間的志向性のみをとりあげたが、個人の時間的展望を把握しようとする場合、複数の側面についてとりあげるべきであっただろう。そのような意味でも時間的展望の測定に関しては改善の余地がある。

以上のような問題点も多々存在するが、今回の研究でとりあげた自己効力と時間的展望という2つの観点は、大学での職業カウンセリングに応用できる可能性を持つと言えるのではないだろうか。

引用文献

- Bandura, A. 1977. "Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change," *Psychological Review*, 84, pp. 191-215.
- Crites, J. O. 1965. "Measurement of vocational maturity in adolescence: Attitude test of the vocational development inventory," *Psychological Monographs: General and Applied*, 79, p. 2.
- Osipow, S. H. and C. G. Carney and A. Barak. 1976. "A scale of educational-vocational undecidedness: A typological approach," *Journal of Vocational Behavior*, 9, pp. 233-243.

- 清水和秋. 1989. 「中学生を対象とした進路不決断尺度の因子的不変性について—COSANを使用し
て—」『関西大学社会学部紀要』21, 143-176.
- 下山晴彦. 1986. 「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』34, 20-30.
- 白井利明. 1989. 「現代青年の時間的展望の構造(1)—大学生と専門学校生を対象に—」『大阪教育大
学紀要』38, 21-28.
- 杉山茂・神田信彦. 1991. 「時間的展望に関する研究(1)—非行少年の時間的展望について—」『立教
大学心理学科研究年報』34, 63-69.
- Taylor, K. M. and N. E. Betz. 1983. "Application of self-efficacy theory to the
understanding and treatment of career indecision," *Journal of Vocational Behavior*, 22,
pp. 63-81.
- 都築学. 1999. 『大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討—』(中央大学出版社)
- 浦上昌則. 1995. 「女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断—Taylor & Betz
(1983) の追試的検討—」『進路指導研究』16, 40-45.